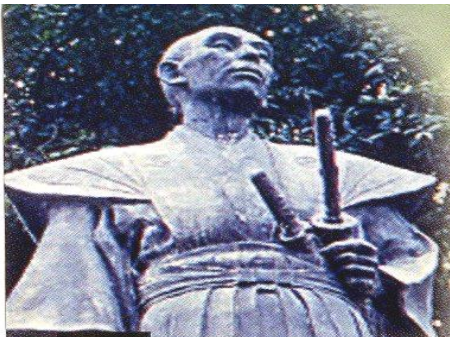


横井小楠 —その業績と生涯—



慶応3年(1867)10月、第15代将軍徳川慶喜は大政奉還(国の政治を天皇にかえす)を朝廷に申し出ました。この大政奉還は、土佐藩前藩主山内容堂が慶喜に建言したことによるもので、建言の内容は坂本龍馬の起草した『船中八策』*が参考にされたといわれます。続いて同年12月には王政復古の大号令が出されました。これは従来の摂政・関白(朝廷の制度)や将軍(幕府)を廃止して、新たに総裁・議定・参与*の三職を創設し、天皇親政による新政府の樹立をめざしたものでした。

21 小楠 士席を復す

慶応3年12月18日、肥後藩長岡護美*と横井平四郎(小楠)に「新政府に登用したいので直ちに上京せよ」との通知書が朝廷から京都の肥後藩邸に届きました。これは新たに発足した新政府の人材登用の必要から呼び寄せられたもので、肥後藩からも既に家老溝口孤雲や京都留守居津田山三郎が出仕していました。小楠登用の知らせが熊本に届いたのは年末の押し迫った頃だと思われませんが、小楠自身にも知らせが伝わったようで、米国滞在の二甥への手紙(慶応4年=明治元年正月3日付)に「拙者も一両日には京都に上るように仰せ付けられる模様」と書いています。

ところが肥後藩は、小楠の登用に対して、藩内に異論が多く、また既に土道忘却との理由で家禄を取り上げ士席(藩士)を剥奪したこともあって、「平四郎儀、近年病気で朝廷の御用に差し出すのは難しい状態」なので辞退したいと、朝廷に申し出ています。新政府への登用は小楠の門人にも召命がありましたが、これも肥後藩は断っています。

一方、長岡護美は、明治元年(1868)2月21日、召命を受けて上京し、参与職を命ぜられました。そして3月5日、副総裁の岩倉具視*に小楠の召命を辞退する書を提出しました。しかし、岩倉は「小楠の江戸表での動静についても聞いており、才知の優れた人物であることもよく承知している。心配には及ばない」と内示し、同月8日に「御用につき上京するように」との召命が再び出されました。

このように岩倉の内示や再度の召命があっても、肥後藩としても放っておかず、小楠を上京させるほかはないと藩議で一決しました。そこで、藩政府は、3月20日付で、小楠暗殺未遂事件関係者で士席

を剥奪されていた都築黙兵衛(四郎を改名)と小楠の2人の士席を復し、さらに同月22日、小楠に対し上京を命じました。

今回の小楠の召命上京については、当人はまたとない機会として勇躍お受けしたことは間違いなく、門人たちも大変喜び

祝福したことは言うまでもありません。特に情報を速やかにキャッチできる在京の門人安場保和は、同じく京都に滞在していた内藤泰吉らと祝杯をあげています。ただ小楠の親友元田永孚だけは「先生が召命に応じることはまだ早いと思う。ひそかに先生の身に危む所あって、素直に喜べない」(自著『還暦之記』)と述べています。

*『船中八策』…坂本龍馬が立案した新しい国家体制論。その内容は、大政奉還をはじめ、議会開設、外国交際、海軍拡張など8か条である。この提言は小楠の『国是七条』をもとにしたものといわれる。

*総裁・議定・参与…明治政府初期の高位の官職。総裁は有栖川宮熾仁親王。

*長岡護美(1842~1906)…幕末の細川藩主韶邦の弟。分家して長岡姓を名乗る。明治3年に熊本藩大参事となり、藩知事の次兄護久を助けて実学党の徳富らを抜擢し、藩政改革を行った。

*岩倉具視(1825~83)…公卿・政治家。公武合体を唱え、和宮降嫁を策す。維新後、副総裁・右大臣となり、政府首脳を率いて渡欧。征韓論には反対する。

このコーナーは、菅秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

幕政の推移と小楠の動向(1866年~1868年)

年号(西暦)	月	主な出来事
慶応2 (1866)	1	薩摩と長州が同盟を結ぶ(薩長同盟)
	4	横井小楠が『送別の語』を二甥に送る
	7	第14代将軍徳川家茂が病死(21歳)
	12	第15代将軍に徳川慶喜が就く(30歳)
	12	孝明天皇が崩御(36歳)
慶応3 (1867)	1	明治天皇が皇位を継承する(16歳)
	6	坂本龍馬が『船中八策』を起草
	10	徳川慶喜が大政を奉還する(大政奉還)
	11	坂本龍馬が暗殺される(33歳)
	12	王政復古の大号令が出され新政府ができる
	12	横井小楠への朝廷の召命を肥後藩が断わる
慶応4 (明治元) (1868)	1	戊辰戦争(薩長等官軍×旧幕府軍)が始まる
	3	再び召命があり肥後藩は小楠の士席を復す
	4	小楠は新政府の政務に就くため上京する
	閏4	小楠が参与に任命される(60歳)
	9	「明治」に改元される(9月8日)